The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	木山寺所蔵の「多羅山一乗院縁起」について
Author(s)	中山, 一麿
Citation	詞林. 2018, 63, p. 27-35
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69767
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

https://doi.org/10.18910/69767　　詞林　第63号　2018年6月

木山寺所蔵の「多羅山一乗院縁起」について

中山　一麿

はじめに

美作国南三郷の惣社である木山宮、その後を継承する木山寺（岡山県真庭市）には、天正五年（一五七七）年の失火以降に集められたと考えられる典籍類が蔵内に纏まって残されている。近年我々は継続してその調査にあたっており、これまでに木山寺蔵書の中には高野山日光院・増長院からの大量の流入本が確認されることや、備前・備中の諸寺との人的交流が盛んに行われていたことなどを明らかにしてきた[1]。その中にあって、木山寺に所蔵されていることに一際不思議の感を抱かせる写本が伝来している。即ち、『多羅山一乗院略縁起』と『摂津国尊鉢邑一乗院記』である。この両本は、大阪府池田市に所在する真言宗の寺院、多羅山一乗院の縁起であり、一乗院は近くの釈迦院と共にかつてこの地にあったという若王寺の塔頭で現存する寺院の内の一つであるとされている。しかし、これまでその縁起などの存在は知られておらず、若王寺を含めたこれらの寺院の歴史は、釈迦院の寺伝に依らざるを得なかった。本稿では、この二種の一乗院縁起に関して、その内容を紹介するとともに、木山寺への伝来に関しても聊か触れておきたいと思う。

一、鉢多羅山若王寺を廻る二つの寺院

大阪大学豊中キャンパスがある待兼山には、かつて多くの寺院が伽藍を並べていた。中でも高法寺は山号を待兼山といい、本尊は十一面観音、行基開基で、歌名所待兼山の絶頂に位置していたと伝えられる。この付近は行基の開基を標榜する寺院が多く、本稿で取り上げる一乗院もその一つである。阪大生が通学に必ず通る国道一七六号線「石橋阪大下」という交差点があるが、そこから池田方面に四〇〇メートル程行くと、箕面川を渡って直ぐに井口堂という交差点がある。この辺りは旧能勢街道と有馬道の分岐点であり、江戸初期頃のものとされる道標も現存している。ここから更に五〇〇メー

トルほど進むと「鉢塚」という交差点があり、一乗院と釈迦院はともにその付近から北に入った辺りに所在する。

これらの寺院の歴史は、「尊鉢」という地名に残るように、その昔行基が夢で感得した釈尊の鉢を、近くの岩窟から掘り出したという奇伝に由来している。現在もその鉢は釈迦院に所蔵されており、これにより釈迦院は「尊鉢厄神」として多くの信仰を集めている[2]。一方で一乗院では、その後巡錫した弘法大師によって彫られたとされる雨宝童子を祀り、何でも融通してくれる仏「融通尊之霊場」として信仰されている。

しかし、若王寺をはじめ釈迦院及び一乗院に関する史料はあまり知られておらず、元禄十四年（一七〇一）完成の『摂陽群談』に「釋迦院　同郡才田村にあり。當寺傳來の寶物、佛在世の鐵鉢は、當荘の窟より出たり。因って院名釋迦院と號し、地名尊鉢と號す。眞言僧守之。」とある他、『大阪府史蹟名勝天然記念物　第二冊』（昭和三年発行、大阪府學務部）の「釋迦院」の項に寺伝を元にした紹介記事がある程度で、その後の地誌類もそれらの記述の範疇にある。この釈迦院の寺伝には、恐らく典拠にした「釈迦院縁起」があったと思われるが、現在はその有無、所在に関しても未詳である。この様な状況の下、今回木山寺から一乗院の縁起が二種出てきたことは、当地の地誌を検討する上でも興味深い史料となろう。以下、その紹介を兼ねて、釈迦院寺伝との相違点を中心に課題を指摘しておく。

『摂津国尊鉢邑一乗院記』（以降、『一乗院記』と略す）は、「長享二歳六月初八日」の奥書を有する漢文体の縁起である。巻子装、全四紙、縦二九．六糎、一紙平均二十行で、やや厚手の楮斐混じり雲母入り紙を使用し、紙継ぎ後に淡墨界線を引いている。本文筆跡は新しく、江戸後期以降の書写と見られる。一方『多羅山一乗院略縁起』（以降、『略縁起』と略す）は「文政五年牛乃孟冬／現住阿闍梨快龍しるす」との奥書を有する和文の縁起である。巻子装ながら『一乗院記』に比して縦二三．九糎とやや小ぶりであり、料紙も楮打ち紙を使用し、雲母は見られない。全四紙、一紙平均十七行で紙継ぎ後に淡墨界線を引いている。両本共に裏打ち補修が成されており、裏打ち紙は少しざらついた楮紙を用いている。また第一紙裏には裏打ち紙の上から両本共に「尊鉢」と墨書されており、同筆と見て良い。現装から判ずるに、両本は別の時期に作成されたものであるが、裏打ち補修された時期は同じと考えられる。加えて、両本共に軸心に黒頂波文様の丸棒軸が使用されており、この軸は他の木山寺所蔵の巻子本の軸と共通している。従って、両本の修復は木山寺で行われたものであり、それは昭和七年頃に木山寺五十世住職であった高峰秀海によって行われたものと考えれる[3]。これが何故木山寺に蔵されているかについては後に考察するとして、先ずはこれらの縁起の内容をみておきたい。

始めに私見を述べれば、『略縁起』の成立は奥書の如く文

政五年（一八二二）に一乗院現住であった快龍によって草されたとして良かろう。丁寧かつ堂々とした行書で書かれた筆致からしても快龍自筆の原本と認めて良かろう。一方『一乗院記』の書写は『略縁起』とは明らかに別筆であり、楷書で書かれているが筆致には拙なさを感じる。書写された時期は『略縁起』よりも下って幕末を遡ることはないと目される。内容的には漢文の古縁起である『一乗院記』（木山寺本の親本）が元々あって、そこから抄出して和文化したのが『略縁起』と思われる。とすれば、問題は『一乗院記』の本文が、奥書にある「長享二歳（一四八八）」の本文を伝えているかどうかということになろう。

而してその内容は、先ず「若夫穀城牧玉鼎…」として、当地の霊験を美辞麗句を用いて述べ、続けて奇珍の名やその謂われとなる宝について未だ知らない人に弁ずるとして始まる。ここには釈迦院の寺伝にみられる、本朝仏伝以前の神功皇后の征韓時に百済より仏舎利多羅宝鉢を得て、仲哀天皇の御代にそれを当地の帰化人功満王（秦の始皇帝の後胤）に授けて、その後散逸を恐れて仏教弘通まで秘蔵していたのが鉢塚だ、とする伝承は見られない。この釈迦院の寺伝は荒唐無稽ながらその後の釈迦院への信仰を支える上で非常に魅惑的な伝承となっている。当地には多数の古墳が現存し、この鉢が出てきたとされる巌窟は近くの五社神社境内にある古墳の石室を指している。その石室には現在も室町初期頃とされる十三重の石塔があり、仏伝以前より霊的空間として認識されてきた地域が中世には宗教的空間へと昇華していったと言える。加えて、渡来人の影響も大きく、特に泰氏との繋がりは多くの指摘がある所でもある。[4] この様な素地を巧に援用して釈迦院の寺伝は成り立っており、寺院縁起が地域の信仰及び生活に浸透していく恰好の事例と言えよう。

ところが、『一乗院記』はその事については全く触れていない。一乗院にとってもこの鉢の由来に関する伝承は重要な要素であるはずであるが、それに触れていないということは、この神功皇后や仲哀天皇の時代の伝承が『一乗院記』の成立当時には語られていなかったのではないかと考えられる。従って、『一乗院記』長享二年成立の信憑性が現在一般化している釈迦院寺伝の成立時期にも少なからず影響を及ぼすと思われる。

『一乗院記』の寺伝に関する具体的記述は、天平年中に行基が鉢を掘り出す経緯から始まる。この場面で注意されるのは、『略縁起』も「釈迦院寺伝」も共に霊夢に依って行基が鉢の場所を感得する事になっているが、『一乗院記』では実際に空中の紫雲や煙根などによって行基がその場所に導かれていくように描かれている。また、行基が感得した時に居た場所も、他では「昆陽寺」とされているが、『一乗院記』は「摂之昆陽」となっており、地名として記している。行基開基として知られる昆陽寺であるが、行基の逗留中は寺院化してお

らず、後に聖武の勅願によって伽藍整備が成されたと伝えられている。従って厳密に言えば、地名として記す『一乗院記』の記述が妥当と言え、伝承過程で「昆陽寺」へと変化していったと考えられる。この違いは『略縁起』が先行する『一乗院記』を典拠としながらも釈迦院寺伝をも参考にした為に生じたと解しておきたい。

釈迦院寺伝との最も大きな差は、釈迦院寺伝では岩窟で掘り出されたのは鉢のみであったのに対して、『一乗院記』では「一瓦鉢」と「一石函」を掘り出したとする点である。そしてその石函を開くと玉軸金泥の「一乗妙法蓮華経」が入っていたとする。行基よりこの宝器出現の報告を受けた聖武天皇は、世に始めて一梵宇を草創して、この鉢と経を納め、多羅山一乗院と勅号したというのである。一乗院の名が「一乗妙法蓮華経」に由来していることは明白であろう。

更には、その後、鉢と経を掘り出した岩窟に神廟を遷し入れて、若王寺の號を加えたと伝えており、このことは、若王寺の塔頭として現存しているのが釈迦院と一乗院であるという釈迦院寺伝に基づく説に反し、「一乗妙法蓮華経」の出現に由来する一乗院がはじめに建てられ、そこに若王寺が後から加えられたということを伝えている。『一乗院起』の出現は、現在は廃絶した若王寺とそれを取り巻く釈迦院・一乗院の関係が一様では無かった事を物語っている。

その後『一乗院記』は、「鉢」に関する記述で釈迦院寺伝と重なりつつも、釈迦院寺伝では触れていない弘法大師の来歴に関する点を詳述する。即ち、高祖遍昭金剛が一乗院で鉢と経を拝して、自ら雨宝童子と春日龍神を彫像したとし、加えて、毘盧普門之妙像を自ら刻んで五層の塔を建ててそこに安置したとする。そしてそこを塔輪寺と言い一乗院の奥院としたと記している。この雨宝童子と春日龍神は現在も一乗院に伝わっていて、共に池田市重要文化財の指定を受けており、制作年代は室町時代とされている。先に述べた岩窟内の十三重の塔が室町初期と目されることなども勘案すると、弘法来歴の伝承も室町初期頃に起源が求められるように思われる。その頃に起こった一連の動きが長享二年の『一乗院記』成立に繋がったと考えれば尤もらしい。

一方、「毘盧普門之妙像」を安置したと言われる塔輪寺に関しては容易に確認できない。『一乗院記』は「塔輪寺」に「後俗呼大日堂」との割書注を付すが、大日堂の存在も現在は知る人もいない。ところが、一乗院蔵『摂州豊嶋郡尊鉢邑多羅山若王寺一乗院惣檀那先凶霊名簿一巻』（以降、『一乗院霊名簿』）には「多羅山若王寺一乗院暦代」として開基行基に続き、「真言開祖弘法大師　弘仁二年」とあり、その横に「并塔輪寺開発」と傍書されている。本書は冒頭に「古記頗多脱落故與日別霊記校合之改記　歳次辛巳文政四年夏六月（中略）現住法印快龍識之」とあり、文政四年（一八二一）に当時の住職であった快龍によって『古記』と『日別霊記』を校合して

起筆されたものと解る。加えて、本堂斜め前にある大日如来石像の基壇部分の刻銘には「現住法印快龍誌／多羅山若王寺／一乗之奥院者／高祖弘法大師／所□建□塔之／口口也故号曰」との文字が判読でき、像の背面には「文政十二年」の年記も確認出来る。本像は、現住長谷川康雄師の談によれば、一乗院の北西、現在の産業技術総合研究所関西センター付近から移されたということである。その時期は「多羅山一乗院財産目録」（昭和二十一年）によれば、「尊鉢大日前三四〇」を「昭和十五年一月陸軍省用地ニ賣却」と見えており、恐らくこれにあたるものと考えられる。彼の地は西国街道沿いにあり、周りには現在も阿波堂、地蔵堂、薬師堂などと通称される堂が並んでいる。一乗院の奥院として「俗呼大日堂」があった場所としても相応しいと言える。これにより塔輪寺（大日堂）の実在と、現在一乗院本堂斜め前にある石像が元はその本尊であったことが判明する。しかし現存する石仏は大師自刻の仏像ではなく、文政十二年に新たに作られたものであった。それに先行する大師自刻の「毘盧普門之妙像」が有ったかどうかは確認出来ない。従って『一乗院記』が現在忘れられた塔輪寺に関する貴重な史料となるとは言え、これを以て『一乗院記』の成立が中世まで遡る証左とまでは言えない。

そこで、この『一乗院起』の説く内容を更に検証してみることにする。先ず岩窟から出てきたとされる「一乗妙法蓮華経」に関してであるが、現在の一乗院にはその原本は勿論、かつてそのような宝物を所蔵していたとする伝承も痕跡も見当たらない。一乗院という寺号がその名残りを伝えているとも解せるが、案外名に引きつけて後代に付された説であるとも考え得る。

次に「尊鉢」の村名についてであるが、『一乗院起』は「尊鉢之村名職而期由也」としており、若王寺の創建後まもなく付された村名であるとするが、現状では文禄年間の史料に「尊鉢」と見えるのが最も早い。従って、聖武や行基の時代まで遡ることは論外としても、『一乗院起』の奥書に見られる長享二年まで遡れる村名であった確証は得られない。

続けて「祭田」の地名に関する記述も見ておこう。釈迦院寺伝では「齋田三百石を賜はり」と伝えられるが、いつのことかも明確には記されない。一方、『一乗院記』は「弘仁十三年新寄荘田数箇所祭田今謂才田其一也以充祭祀之料」として空海の来歴を期に嵯峨天皇より賜ったと記している。しかも「祭田」には「今謂才田」と割書を付して注している。「才田」の村名は『五畿内志』や『摂陽群談』に見られるが「元禄郷帳」や「天保郷帳」に見られないことを勘案すると、近世初期頃まで通称されていた地名と考えられる。とすれば、「今謂才田」と記す『一乗院記』の成立は当地が「才田」と呼ばれていた近世初期以前ということになる。しかし、「才田」という地名は明治に入ってから復活して町名に採られており、在地では近世期を通して俗称されていたものと思われる。

従って『一乗院記』が近世初期以前の成立であることを比定する材料としては弱い。

如上の如く『一乗院記』の成立は、俄に断じがたい。私見で判ずれば、近世初期頃までは遡れると思われるが、やはり長享二年成立とするには躊躇せざるを得ないといったところであろうか。本書の成立は、一乗院史に止まらず、地域史にも広く影響するものと言えるが、現状では史資料としては参考の域を出ない。しかし、他に明確な文字史料が無い当地においては、長享二年成立を鵜呑みには出来ないが、参照すべき価値は十分にあろう。

二．木山寺への移入について

最後にこの二種の縁起が現在木山寺にあることについて触れておく。既述の如く、この二つの巻子本は木山寺に於いて修復されており（昭和初期ヵ）、二巻共に同時期に木山寺にもたらされたものと思われる。『略縁起』は文政四年の快龍の奥書をもっており、木山への移入はそれ以降である。快龍は高野山釈迦文院一代の龍珍[5]の法を受け、秀栄（勝尾寺正智院世代又帝尺寺中興、延宝六年寂）より数えて第十九代の一乗院住職である。「當寺再建」（『一乗院霊名簿』）と記されている事からも、伽藍の整備などに尽力したものと考えられる。先にも触れた通り、『一乗院霊名簿』（文政四年）の起筆主であり、大日像石仏（文政十二年）の願主でもある。これらにより、その活動は主に文政年間に行われた事が解る。後に今津真福寺へ転住して、天保十三年（一八四二）五月五日に入滅したと記される（『一乗院霊名簿』）。

ここで一乗院歴代を見てみると、天明四年に寂した観心という僧に注目したい。観心は一乗院中興とされる僧で、高野山成蓮院一代真源を師としていることが『一乗院霊名簿』に見られる。真源は当時の高野山を代表する碩学で、彼の流派は備前岡山の安住院で寛保二年（一七四二）に伝法・結縁の二会灌頂を行い、そこを拠点として真源相承の三宝院憲深方の一流伝授を広めていった。そしてそれは安住院とも関わりの深い木山寺尊高（一七二八―一八一〇）によって木山寺にも相伝されている[6]。木山寺は近世期を通して高野山高祖院末であり高野山との繋がりは深いものがある。中でも真源の法流による備前・美作への教線拡大期は、関係する僧の往来が最も盛んな時期であったと言える。一乗院もまた観心や快龍の例に見られる如く高野山との繋がりは深い。一乗院は高野山から備前・美作への街道沿いに位置しており、特に真源相承の法流という共通性を加味すれば、途中の宿所として機能したことは容易に想像されよう。木山寺と一乗院を結びつけたのは、この真源の時代のことではなかろうか。

その後、明治期の神仏分離の影響で木山寺も混乱期を迎えるが、一方でこの時期を境に他所の典籍の待避場所にもなっている。高野山内で退転した日光院・増長院所蔵の典籍の一

部も、結果的に木山寺に蔵されるに至っている[7]のは、木山寺では焚書行為などが行われなかった為で有ろう。この時期に寺伝を顕彰する重要な縁起を木山寺に託したとしても不思議は無かろう。

ところが一つ問題となるのは、一乗院先代が書き残された『多羅山若王寺一乗院由緒書』という便箋に書かれたものがあって、そこには木山寺にあるはずの二種の縁起を踏襲しなくては書けない内容が綴られているのである。これは「昭和の大戦中…」というくだりが見られることからも戦後に書かれたものであるが、そうすると先住は現在木山寺にある縁起の内容を知っていたことになる。しかし、既に昭和初期までにこの二種の縁起が木山寺にあったことは、先述した通り修復の痕跡から間違い有るまい。

とすれば、考えられるのは一乗院にも同じ縁起が残っていたということであろう。現在はその所在の確認が取れないだけではなかろうか。そしてもし一乗院にも同じ縁起が残っていたとすれば、それは恐らく木山寺蔵『一乗院記』の親本であったと考えられる。

従って、これまで述べた事を整理して考えると、最も早くからあったのが『一乗院記』で（但し中世まで遡れるかは依然として存疑）、それを元に文政五年に快龍によって釈迦院の寺伝を加味しつつ作られたのが『略縁起』であったと思われる。その後木山寺へ移入するにあたって、『略縁起』は原本を、『一乗院記』は複本を書写して持ち去ったものと考えられ、その時期は神仏分離の状況下であった可能性が最も高いと考える。その後、木山寺での修復を経て、現在も木山寺所蔵の典籍として存している、と推定しておきたい。

おわりに

資料提供に惜しみなくご協力くださった木山寺住職高峰秀光師、並びに一乗院住職長谷川康雄師には心より深謝申し上げる。と同時に、現状では『一乗院記』の長享二年奥書を要検討とせざるを得ないことを残念に思う。しかし、想定外のところから出てきた二種の縁起について、内容と伝来に関する問題提起にはなったかと思う。今後、当地の史資料として認知され、多方面からの史料批判が加えられることに因って、『一乗院記』の虚と実が明確になっていくことに期待したい。

【附記】本稿は科学研究費補助金、課題番号「15H03181」による研究成果の一部である。

※翻刻にあたっては、以下の方針で行った。

・原本行取りは全て追い込みとした。

・異字体・片字・旧漢字等は電子入力可能な範囲で原本に近い字体を優先して採用した。

《翻刻》

多羅山一乗院略縁起

抑摂津国豊嶋郡尊鉢邑多羅山若王寺一乗院開闢之濫觴を尋るに往昔人皇四十五代聖武天皇の御宇天平年中に行基菩薩当国昆陽寺にましましてある夜不思議の霊夢を感し給ひ明朝起き見給ふに忽艮の方に當てあやしき光り地より起て雲をつらぬけり急き其所に赴き地をあはかせ見給ふ事壹丈餘則石窟（いわや）の中より一つの石鉢を堀出せり行基見給ひて是はむかし釋尊の御鉢此所に飛来れるなりとて拝し給ふ是より後此里を尊鉢村と名付たり時に虚空に聲有て曰此所は諸佛転輪の地菩薩利生の砌なりと行基感歎して既に草堂を建立し自ら大悲観自在尊の霊像を彫刻し安置し給ふ此よし帝の叡聞に達し聖武皇帝御感の餘り此地に伽藍を草創せしめ勅して多羅山若王寺一乗院と号し玉ふ其後弘仁五年の春高祖弘法大師此地に遊化し給ひ暫當寺に湯を駐め給ひ恭しく本尊を拝して雨宝童子春日龍神の両像を彫刻し脇士として三尊威徳の霊光を顕し當寺を再興あつて真言宗を開闢し給ふ則當院今の本尊なり此事嵯峨天皇叡信ましまして弘仁十三年に新に荘田数ヶ所を寄附し祭祠の料と成し玉ふ祭田（さいでん）も其中の一つなり後の人あやまつて才田（さいだ）といふ又大師別所に宝塔を建立し自ら大日如来の尊像を彫刻し安置して塔輪寺と号し給ふ今俗に呼て大日堂といふ則當院の奥の院なりしかしより已来瑜伽の法水たゆる事なく其霊験具に記にいとまあらす是薩埵の御利益いとしるすゆへなりむかしは伽藍僧坊多しといへとも物換り時移りて興廃亦多し今潮一乗院釈迦院二院のみ残れり然あれとも當寺本尊の威光あつく信仰の人は現世の利益のみにあらす当来は猶すくひたまはむ御誓ひ何そ貴しからすとしかいふ

文政五年牛乃孟冬

現住阿闍梨快龍しるす

摂津国尊鉢邑一乗院記

若夫穀城牧玉鼎而深更発光暉霊嶽包鋭剣而衝天吐彩曜温潤盈内則英気漏外徳澤現外則綏柔厚内是故恩覃金石則涼風出徳臻幽微則景星露歌詠之聲唱四方而朱草生人君之徳合乾坤而萱莢茂泊如和璧待時而得竒珍之名宛馬入華而壇騏龍之美按剣之徒空馳未知其蘊奥解宝之人試辨能識其異珍乎往昔天平年中有行基大士徳行充宇宙而遊化應物神智争日月而巧益絶倫聖武皇帝寵崇之殆超釋輪槐棘臣佐敬慕之頗勝天祠偶然居摂之昆陽多年于斯矣俄然謄望空際則紫煙靉靆竒然感偶祥瑞而進止彳亍暫捜烟根深抱恠志能察詳観則発於地徹于天直如竿也進歩艮則届一石崛於是命郷民穿地丈餘得一瓦鉢与一石函乃開函則一乗妙法蓮華経玉軸放光泥金射歩捧鉢而觸物則其声鏗鏘而清亮也深尺餘径合之容一斗計量軽不満于一百銖也世俗以似石傳謂石鉢也司州衛士度感天鉢於空中（事見異苑）亦以應合覩焉也大士感稱彌篤以件々奏于帝叡歎宝器之出現于世肇草創一梵宇而以納彼経鉢且使基司其事勅號多羅山一乗院後人還遷神廟於石崛加若王寺號

也蓋依経鉢之感得也尊鉢之村名職而期由也為其地形乎左鳩峯和光碧流常通慈航右馬山醫王温泉鎭施救療浪華麗城映朝暉兜卒霊嶽凝暮煙大士深察鉢是大悲之持物経乃観在之三明詳古佛転輪之勝境将来弘教之霊域自刻雕大悲観在之妙像而應帝之所願也于時天下有大旱基咒彼宝鉢仰碧空而持念焉忽有青龍降入鉢器天油然興雲霈然降雨大有年焉何遺符堅之憂哉或又以鉢盛水焼香咒之須曳鉢中生青蓮華全似圖澄之驗也是故錙素敬仰之日盛郷里崇祈之月新而后吾高祖遍照金剛歩於紀之野山詣于摂之慈氏之日曳赴一乗之刹拝経及鉢且自雕雨宝童子春日龍神之両像備護法之辨事也弘仁聖帝遙仰止経鉢之威霊而以弘仁十三年新寄荘田数箇所祭田（今謂才田）其一也以充祭祀之料遍照大師亦自刻毘盧普門之妙像別建五層之制底安置斯尊而膀塔輪寺（後俗呼大日堂）以為一乗之奥院樹冊瑜伽之道場自爾以還吾呬耶蔵之法水洋々普灑於萬國渤馱耶乗之化用蕩々常溢四海郷縣受福懸超雲夢之澤民庶得益卻齋隨意之玉國家昇平之善祷共江流無渇王侯攘災之鴻祈與山壑無絶大悲妙感應于聲不唐経鉢遺香熏于刹斯新涼燠時移今不如其初星霜循環再有復被始乎興廃有時出没隨運今依古老之所伝聊記其顛末耳

長享二歳六月初八日

（注）

（1）『神と仏に祈る山―木山寺社史料のひらく世界―』（中山一麿編、法蔵館、二〇一七）

（2）釈迦院に関する先行研究としては、豊島修「鉢多羅山若王子釈迦院と庶民信仰」（『大谷學報』第六十八巻第四号、一九八九．二）がある。

（3）注1収載、中山一麿「伝受史料からみる木山寺経蔵の史的一端」。

（4）『新修 池田市史』など参照。

（5）龍珍は高野山釈迦文院信海房龍珍のこと（「金剛峯寺諸院家析負輯」『真言宗全書第三十五巻』）。一部の伝承史料で一乗院が釈迦院末であったとされるのは、釈迦院と釈迦文院の混同による誤解であろう。

（6）同注3

（7）注1収載、柏原康人・中山一麿「木山寺所蔵の日光院・増長院旧蔵聖教と真躰房無動」。

（なかやま・かずまろ　大阪大学大学院文学研究科招へい研究員）